

「白羽箭」から見る泉鏡花の反戦思想

—— 漢詩を中心として ——

于 達

はじめに

泉鏡花の「白羽箭」は、日露戦争直前の明治36年11月、『文芸倶楽部』第9巻第15号に発表された。鏡花自筆年譜明治36年の項目に、「十月、『白羽箭』に出づ。月光、草に深き、古城を歌へるなり」と記されている¹。

本作は、藩侯奥平伯爵家の令嬢竹子姫のお国入りで賑わう若松の町を舞台に物語が展開されている。青年詩人の松坂新三郎は、竹子姫の婚礼の式場に持参する土産として、鶴ヶ城の歌を作るように秋山少将に依頼された。その鶴ヶ城の歌に、少将の娘で、新三郎の恋人である衣子がバイオリンを弾いて合わせるようになっていた。新三郎は、鶴ヶ城の歌を作るべく、若松城の城跡に登ってみたが、その奇怪な景観に圧倒され、詩を作ることができなくなる。苦悩する新三郎は、たまたま現地にある掛茶屋に入り、お房という女性に出会い、そこでお房が世話になっている清瀧楼の女房から戊辰戦争の話聞く。戊辰戦争で味方の武士に父親を殺された清瀧楼の女房は、自分は城に怨みを持っていると言い、そして、姉の姑に苛め抜かれた母親が長州の武士と結婚したためにひどい目に遭ったお房は城に憎まれている、と言う。それを聞いた新三郎も「いかにも城は怨むべしだ、僕も大に怨む、馬鹿に癩に障る、無法に憎い。」と言って、こちらに来た経緯を2人に聞かせる。新三郎は「龍宮の声」より、恋人の衣子のバイオリンの音に魅了される自分のことを情けなく思い、衣子と縁を切ることにする。小説の最後に、新三郎は弓を持って、城に向かって狙いを定めるが、衣子のバイオリンの音が気になって、第1矢を射損ねる。衣子を捨てる決心したことで、ようやく第2矢で城を射通すことができるのである。それと同時に、新三郎は見る見るうちに、「割然として、心ひらけ、鏘然として文字声あり、腹案成んぬ、立処に」と詩が浮かび、芸術に開眼する。

「白羽箭」は芸術への開眼の話として読まれることが多いが、作中には戦争に関わる設定や内容が多く描かれていることも見逃してはならない。話の舞台である会津若松における戊辰戦争の記憶、清瀧楼の女房が語る会津籠城時の話、お房と清瀧楼の女房の悲惨な身の上など、ま

た、竹子姫の婿の侯爵が陸軍少佐で、衣子の父親が陸軍少将であるといった設定、これから「御国のために兵隊になる」と言う町の者など、「白羽箭」における主要人物は例外なく戦争と何らかの形で関わっている。そして、戊辰戦争の悲劇に近い過去の出来事である一方、新たな戦争（日露戦争）が起こる直前であることが暗示される時代背景を見る必要がある。

鏡花の戦争を主題にした作品として、「予備兵」（1894年10月 『読売新聞』）、「海城の余波」（1894年11月 『幼年御手函』）、「琵琶伝」（1896年1月 『国民之友』）、「海城発電」（1896年1月 『太陽』）、「凱旋祭」（1897年5月 『新小説』）、「留守見舞」（1904年8月 『三尺剣』）、「柳小島」（1904年9月 『文芸倶楽部』）などが挙げられるが、中でも特に戦争小説として取り上げられてきたのは「予備兵」、「琵琶伝」、「海城発電」、「凱旋祭」である。そのうち、反軍反戦的傾向の「琵琶伝」と愛国主義の標榜に批判的な「海城発電」は、昭和15年の岩波書店版『鏡花全集』の刊行に際して、太平洋戦争勃発前夜の時局に配慮して収録されなかったという²。

本稿では、鏡花の戦争文学としてはほとんど論及されたことのない、この「白羽箭」を取り上げ、その漢詩的要素に焦点を絞って、あらためてこの時期の鏡花の戦争に対する態度について考えてみたい。

1. 先行研究と本研究の目的

鏡花の作品における反戦思想についての代表的な先行研究としては、三浦一仁、村松定孝や小林弘子の研究がある。三浦は、鏡花の戦争に取材した作品の主題は主として「戦争が愛し合う者たちを引き裂いていくという戦争のもつ悲惨さへの訴え」と「戦争熱にうかされる世俗的な人間に対しての批判」であると指摘した上で、それらの作品は反戦というより反軍的であると明言している。一方、「予備兵」や「柳小島」を挙げ、鏡花には反軍・反戦的な面と共に、戦争を肯定する面があることにも言及し、鏡花は日清、日露戦争を義戦であると判断して肯定したものの、戦争そのものについては決して肯定していないと述べている³。村松は、「琵琶伝」や「海城発電」を証左として、戦争、軍隊、軍人精神（武士道）に対する嫌悪の激しさを指摘した上で、「夜叉ヶ池」、「天守物語」にもこのような体制批判があり、国粹主義や武士道に対する作者の激しい憎悪がうかがわれると述べている⁴。小林は、鏡花の作品はいずれも戦意の高揚よりも、戦争を背景に引き起こされた悲劇の描写に重点が置かれ、虐げられた者への共感を主調に、声高なものではない反戦の色合いを打ち出した作品が目立っていることを指摘している。また、「海城発電」の発表については「かなりの勇気を要した」こととし、反権力と弱者最良は、その芸術的作風の中で鏡花が精一杯に込めた自らの気概であると強調している⁵。

ほかに、実証的な歴史研究やカルチュラル・スタディーズの視点に基づき、当時の新聞記事から素材を求めたことや歴史的事件などから影響を受けたことなどを指摘する吉田昌志の「ふたつの『予備兵』——泉鏡花と小栗風葉」や「泉鏡花『海城発電』成立考」、作品における

様々な要素の表象について新たな論を展開した菅聡子の「日清戦争という〈表象〉——一葉・鏡花のまなざしをめぐる」、禧美智章の『『戦争』小説としての『海城発電』——『例外状態』と『剥き出しの生』をめぐる』、梅山聡の『『海城発電』論への一視点——日清戦争劇・軍夫・鏡花のパラドックス』などの研究がある⁶。作品に対する分析が多角的に進んでいるのにもかかわらず、鏡花の戦争を題材にした作品に関する研究は依然として「海城発電」をはじめとした早期作品に集中している傾向がうかがえる。

「白羽箭」に関する先行研究は極めて少ないが、その中では、実証的な調査で鏡花の会津旅行を跡付けたことによって、作品の成立過程を考察した田中勳儀の『『白羽箭』の成立過程——鏡花と会津若松』が代表的なものである⁷。田中はまず、明治33年7月に『新小説』に無署名で発表された「会津めぐり」という紀行文は鏡花が書いたものと推測する。そして、明治33年1月に発表した「白羽箭」の序章を思わせる「弓取町人」が、それから4年足らずの月日を経て、中編小説の「白羽箭」に結実する間に鏡花は、再度の会津旅行を果たし、より詳しい取材を行ったと主張している。「白羽箭」は「会津めぐり」で見られる現地取材を活用しつつ、「反忠義・反俗精神に裏付けられた芸術独立のものがたり」を構成したものであると強調し、そして、「現地で聞いた会津落城をめぐる悲劇をもとに、あくまでも弱者の立場から反俗の姿勢を貫くことによって、芸術開眼の主題が描かれようとしたのである。」と結論づけている。

田中の考証によると、「白羽箭」は、発表前の予告では「しらはのや」であったが、実際に発表された時に漢語の「白羽箭」となり、「はくうぜん」とルビが付された。ここに中国文学への意識をみたい。実際、「白羽箭」は中国文学、特に辺塞詩の中で武力の象徴としてよく使われるモチーフであった。鏡花の蔵書目録に詩集と詩文集が17部70冊、詩論書が3部17冊もあり、鏡花は漢詩に馴染んでいたはずなので、「白羽箭」という3文字に小説の題名を改めたのは、決して一時的な思いつきではないと思われる⁸。また、作中、主人公の新三郎が3度も吟じている中国明代の詩人、薛蕙の「塞下曲」は、作品全体を貫く重要な要素である。にもかかわらず、この漢詩について論じているものは全く見当たらない。

題名である「白羽箭」の背景にある漢詩的意味と文中で3度も吟じられる漢詩「塞下曲」を中心に、「白羽箭」における戊辰戦争という歴史的背景や小説が書かれた明治36年という時代的要素などを視野に入れて、あらためて「白羽箭」に表出されている鏡花の戦争に対する態度について考察するのが本稿の目的である。

2. 「白羽箭」における漢詩的意味

「白羽箭」というのは尾部を白羽で飾ってある箭のことで、古代、戦争で使われた武器であった。白羽箭を意味する言葉がこの作品の中に初めて登場するのは、城で小商売をやっている佐野屋が竹子姫に話した時である。若松は「武は盛なお国柄」なので、弓矢の道が未だに

廃っていないこともあり、弓術の会の連中が先ごろ射芸上達の願いをこめて、白木の弓と「白羽の矢」を摩利支天に奉納したという。作品末尾、新三郎が摩利支天のお堂で衣子に別れを告げた後、扉に倒れかかろうとした時に、突然肩にかかったのはこの摩利支天に奉納された弓とそれに添えた2條の「白羽箭」であった。新三郎は、様子を見るためにその場に登場した清瀧楼の女房に促され、城を的に矢を射るが、第1矢は射損じた。そして、「思い切つて一步を進み」、「姫神の御名を胸に、鎧の袖を揺直せば」という様子で第2矢を放つと、「弓は大浪を打つて返した、矢響き高く白羽の神箭、遙に遙に霏々として、風と相打つ雪一片」となって新三郎は手応えを感じ、割然として心が開けた。つまり、元々地元の人が射芸上達のため摩利支天に奉納した白羽箭であったが、最後には青年詩人新三郎の芸術開眼の神矢となった。

前述したように、この小説は発表される前の予告では、題名が「しらはのや」であったが、実際に発表された時に漢語調の「白羽箭」となり、「はくうぜん」とルビが付された。小説においても、最初は「白羽の矢」であったが、小説の最後に「白羽箭」^{しらはのや}となっており、表記の改変は興味深い。

「白羽箭」という表現となると、中国文学、特に戦争を題材にする詩文や小説などによく見られる言葉なので、その背景にある含意もあらためて考察する必要があると思われる。そこで、中国の漢詩に関連付けて、「白羽箭」に託される戦争的意義を捉えなおし、「白羽箭」に対する新たな読みを試みたい。

「白羽箭」は中国の古典詩、特に辺塞詩というジャンルによく使われるモチーフの一つである。例えば、次のような詩句がある。

蛇弓白羽箭，鶴轡赤茸鞞。(紫驪馬 [唐] 楊炯)

驂馬黃金勒，珣弓白羽箭。(古塞下曲 [唐] 陶翰)

射賊曾飛白羽箭，閉門空枕綠沈槍。(讀史有感 [宋] 陸游)

岐路凋零白羽箭，風霜破弊黑貂裘。(西村醉婦 [宋] 陸游)⁹

これらの詩文のように、「白羽箭」は古代、戦争に使われた重要な武具の一つであり、戦争を表現する重要なモチーフの一つとなっている。中国の漢詩の中では「白羽箭」を通して戦争の残酷さや戦争に対する批判を表そうとした李白の「北風行」が特に有名である。

北風行

燭龍棲塞門、光耀猶旦開。

日月照之何不及此、唯有北風號怒天上來。

燕山雪花大如席、片片吹落軒轅臺。

幽州思婦十二月、停歌罷笑雙蛾摧。

倚門望行人、念君長城苦寒良可哀。
別時提劍救邊去、遺此虎文金鞞鞞。
中有一雙白羽箭、蜘蛛結網生塵埃。
箭空在、人今戰死不復回。
不忍見此物、焚之已成灰。
黃河捧土尚可塞、北風雨雪恨難裁。¹⁰

その訓み下し文を以下に引く。

北風行

燭竜寒門に棲むも 光耀 猶お旦に開くがごとし
日月之を照らすも 何ぞ 此に及ばざる 惟だ北風の号怒して 天上より来れる有り
燕山の雪花は 大なること席の如く 片片 吹き落つ 軒轅台
幽州の思婦 十二月 歌を停め笑いを罷めて 双蛾 摧く
門に倚りて 行人を望み 君が長城の 苦寒を念いて 良に哀れむ可し
別れし時は 劍を提げ 辺を救わんと去き 此の虎文の金鞞鞞を遺す
中に一雙の白羽箭 有るも 蜘蛛 網を結びて 塵埃生じたり
箭は空しく在り 人は今 戦死して 復たびは回らず
此の物を見るに忍びざるも 之を焚けば已に灰と成らん
黄河 土を捧ぐれば 尚お 塞ぐ可し 北風 雪を雨ふらして 恨みは裁ち難し¹¹

国境守備の応援に、劍を引っ提げて出征していく夫は黄金作りの矢袋を残したが、もはや蜘蛛の糸が張り、埃だらけであった。あの人はあえなく戦死してしまい、二度と帰れなくなった。形見として残された白羽箭など見るのは辛い、いっそ燃やしてしまっただけに灰にした。河の水でも皆で土を運んでいけばいつかはせき止めふさぎもしようが、北風が雪を降らせるこの季節わが胸にこもる恨みはもはやどうにも断ち切りようがない¹²。

戦争で夫が戦死した女性の視点から書かれたこの楽府詩は「白羽箭」というモチーフを用いて戦争に対する「恨み」を表現している。

「北風行」は李白が天宝11年の冬、幽州に旅行した時の作である。戦争に駆り出された兵士の妻の言葉を借りて、必要以上に東北辺境の契丹などの少数民族の政権を挑発し、衝突を繰り返した安禄山や当時の朝廷を批判している。戦争に使われる武器である白羽箭は同時に戦死した夫の形見でもある。武勇を象徴する白羽箭は未亡人に見れば、怨恨の元となっているので、見るのに耐えられなくて、それを燃やしてしまうという行為には、戦争で家族を失った人の苦痛、更に戦争に対する恨みが込められているのであろう。これは「白羽箭」の中で何度も引かれている薛蕙の「塞下曲」とも主題が共通している。

「白羽箭」は必ず「北風行」から影響を受けたとは断言できないが、鏡花蔵書には『分類補註李太白詩』（12冊）があり、「北風行」は卷之三の楽府の部に収録されているので、鏡花はそ

れを読んだ可能性が十分考えられる。直接に「北風行」からの影響がないにしても、小説の題名を「しらはのや」から「白羽箭」に改めた背後には、「白羽箭」の漢詩的趣向に対する鏡花の理解が働いているだろうと思われる。

3. 薛蕙の「塞下曲」

「白羽箭」では、主人公の新三郎が口に出して3度も吟唱する漢詩は、薛蕙の「塞下曲」である。薛蕙とは中国明代の詩人で、著書として、『西原遺書』、『約言』、『考功集』、『老子集解』などが挙げられる。「白羽箭」で引かれる漢詩は「塞下曲」3曲のうちの一つで、清の錢益謙が編纂した『列朝詩集』の丙集第12に載せられているが、薛蕙の詩集『考功集』(10卷)には収められていない。したがって、もし鏡花が知るとすれば『列朝詩集』によると思われるが、鏡花蔵書目録にはそれにあたる書籍がない。薛蕙は中国でも日本でも詩人としてそれほど有名ではなく、しかも「塞下曲」は薛蕙の詩の中でよく知られている作でもない。よって、鏡花がどのようにしてこの詩に触れたか、現時点では明らかにできないが、『列朝詩集』が図書館蔵文庫や前田家尊経閣文庫に所蔵されており、日本に入ってきていたことは確認できるため、特に後者は鏡花の郷里との関係で気になるところである。

さて、「白羽箭」で引用されている「塞下曲」を以下に挙げる。

にちぼいんふうてついをふく
日暮陰風吹鉄衣
こぐんでんとうぢうゐにおちいる
孤軍転闕陥重圍
りまぢうのはくこつゆくへまさにくちぬべし
虜中白骨行応朽
ろうじやうのこうさうなほかへるをおもふ
楼上海粧尚思帰

『列朝詩集』のそれと対照したところ、原文の「行当朽」が「行応朽」に、「尚憶帰」が「尚思帰」になっているが、それは鏡花の記憶違いなのか、読んだ文献による異同なのかはわからない¹³。

「塞下曲」は楽府旧題の一つで、兵士の遠征や戦争の場面、家族への想念などが描かれ、辺塞詩というジャンルに属する。現代語に訳せば、「日が暮れ、陰風が鉄衣を吹く。孤軍が各所にめぐり戦った末、敵の重圍に陥ってしまった。敵地に遠征した兵士は白骨が朽ちているにもかかわらず、(故郷に残された)妻はなお化粧をして戻ってくるのを待っている。」というように、塞を守るため遠征する兵士の苦戦、故郷に残っている妻が夫を思っていることが描かれている¹⁴。

中国の詩、中でも中国の辺塞詩には、このように戦争や遠征する夫に対する思慕を描くものが多々あるのにもかかわらず、あまり知られていない薛蕙の「塞下曲」を何度も引用している

のは、この詩が内容的にも意味的にも「白羽箭」の主題と合致しているからだと考えられる。

この詩が最初に引かれるのは、新三郎初登場の時である。鶴ヶ城の歌を作るために、わざわざ東京から若松へやって来た新三郎は鶴ヶ城に登って、城跡の奇怪な情景を恐ろしく思う余り、「僕のやうな者が、この城を文字にうつして、ヴァイオリンの音に合せるなどとは思ひも寄らん」と思うようになってしまった。それで落ち込んだ新三郎がこの「塞下曲」を吟じながらお房の茶屋を通り過ぎたところ、お房に声をかけられる。

詩人として城の歌を作ることに行き詰まっている新三郎が漢詩を口に出して吟じるのは、そこに若い詩人の心を打つようなものがあることが暗示されているだろう。つまり、「塞下曲」は新三郎が城に登ってみた後の心境とも理解できよう。新三郎は、城跡に入った時の情景についてこのように語っている。

右にも左にも前にも後にも、轟々と、五抱十抱の大木、何の事はない見上げるやうな、黒革緘の勇士豪傑に取巻れた気がして、大に胆を挫がれたね。

…明るくなるかと思ふと、暗くなる、吹く風も同一冷さぢやないやうな、それでも身体は汗になった。

唯其、熊ヶ谷をはなれるとすぐに蕨、奥州の入口からずツしりと大きな重いものの坐つたやうな、其ばかりか、梟は鳴く、朽木は光る、見晴の田圃にも、那処此処、灯か、それとも鬼火か、血か骨かと思ふと、又野にも山にも、敵の旗が群つて居るやうな気持がする。

また地の文には次のような一節もある。

地の底には呐喊の声。

其処に立つは我ならず、正に一個史中の人傑、結束して此処に上つて、山野を圧した敵に望み、白旗を振れば昼となり、黒旗を動せば夜が来るやうに思ふ（後略）

城に入ること自体がまるで戦に臨むことであるように表現されている。新三郎は城に潜り込んでみたところ、そこでまさに「日暮陰風吹鉄衣、孤軍転闘陥重圍」のような境地に陥ってしまった。そのために、城を出て、思わずこの詩を口に出して吟じることになったのであろう。

この詩は、新三郎が城に潜入した時の体験や心境を表現しているだけではなく、若松城の歴史とも関連している。『会津の歴史』によると、20数藩の同盟の中で、会津がほかのどの藩よりも手ごわく、激しい抵抗に出るであろうことを知る政府軍は「枝葉を刈って根本を枯らす」作戦を取って会津を孤立させようとしていた。越後の戦線は、政府軍の猛烈な攻撃で退却を余儀なくされ、白河、二本松が陥落し、戦闘は次第に会津の国境に迫る。猪苗代城が攻め落とされ、政府軍が若松城下に殺到し、城門を挟んだ戦闘は熾烈を極めたという¹⁵。「日暮陰風吹鉄衣、孤軍転闘陥重圍」という2句はかつて若松城で起こった熾烈な戦況を克明に描き出してい

るのである。つまり、新三郎は旧戦場であった鶴ヶ城に身を置くことで、かつてそこで行われた戊辰戦争を間接的に実感することができ、城に「見負けた」というより、戦争の残酷さを身をもって感じ、恐怖心が生じた、と読むことができよう。

新三郎が2回目に「塞下曲」を詠んだのは、清瀧楼の女房からお房の身の上を聞いた時である。城に登って戦争の残酷な雰囲気を感じ取った新三郎は、戦争の被害者とでもいべき清瀧楼の女房とお房から間接的に戦争の様子を聞くことで、戦争における残酷非道がより具体的に身近に迫るように感じられた。お房の母親が姉の姑に「死ね、やれ死ね」と責められたのを清瀧楼の女房から聞いた新三郎は、目を見張って、再び「あゝ、楼上紅粧尚思還、尤^{ママ}だ、死ねない！」と幾度もうなずいた。

戊辰戦争の際、会津藩では、市街戦の戦死者460余人、藩士の家族で殉難したもの230余人、約1,000戸の家が焼失し、街中は地獄図を思わせたという。白虎隊の少年たちや、西郷頼母の家族21人も自刃したように、自ら命を絶つような惨事は数えきれないほどあった¹⁶。お房の伯母にあたる人の姑がお房の母親を自害しろと責めたのはこの時の実態を反映している。新三郎がこの詩を繰り返して口にするには、戦争における残酷な行為への反感、武士道、忠義などというより、生命の方が尊いという人間性を尊重するような価値観がうかがわれる。

「嗚呼忠臣、楠子墓、忠義は黙つて行ふべし、不断饒舌るべきものではない、既に飯盛山の少年隊の如きも然うだ。えらいえらいと誉め倒しにして、何為^{なぜ}其の親に別れ、姉に別れた、心の中^{うち}を汲んでやらないだらう。」「国に殉ぜし自殺なんかさせられた日にや、恋しい良人の前途^{ぜんと}を見届けることは出来ないぢやないか。女房を連れて逃げたのも無理はない。自殺を拒んだのも道理だ。しかし、唯一途^{たゞいちづ}に忠義と心がはやつて、君のため国のために、夢中で討死をした人達は、なほ気の毒だ。何為^{なぜ}なら、之は、恋も欲も知らない嬰兒^{あかんぼ}の、呼吸^{いき}の根を留めたやうなもんだから」というのは新三郎が戦争に対する反省であり、日露戦争直前にはやっている戦争崇拜という歪んだ気風に向けた批判でもあろう。それがすべて「楼上紅粧尚思還」という1句に集約されているのである。

新三郎は茶屋を出て、摩利支天の御堂へ参る時に、「行つて入らつしやい」、「お早く戻つておくれやす」と言ったお房と清瀧楼の女房に対し、もう一度「虜中白骨行応朽、楼上紅粧尚思還」を吟じる。お房と清瀧楼の女房が待っているので、すぐ戻ってくるという意味があると同時に、自分のことを待っている恋人の秋山衣子のこともここで暗示されている。

城に入り、完全に城に圧倒された新三郎にひきかえ、衣子は故郷の公会堂でバイオリンを演奏し、「御家老様のお娘御、江戸さ一番の芸者」として拜まれていた。新三郎が城を見に行つたことは結果的に恋人である衣子との不釣り合いを暴き出すことになる。衣子のことを「貴女のやうな、陸軍少将の令嬢で、音楽花形で、下谷一番伊達者」と言い、自分のことを「城の番人」、「折助仲間、緞賣^{をりすけちゆうげん}の類^{さしうり}」、「濠の埋草にもならない野郎」などと貶めることからわかるように、新三郎は衣子に対して劣等感を抱いている。そういう劣等感はただ芸術上の造詣による

ものではなく、身分上の差異にもよると思われる。新三郎は青年詩人であるのに対し、恋人の衣子は父が陸軍少将だったという家柄なので、戦争に対する立場も違うわけである。戦争が迫ってくる中、新三郎は会津への旅を通して反戦の気持ちがより一層強まり、それが2人の関係にも投影し、2人の別れを導いたのであろう。

このように、「塞下曲」は小説全体で一貫して重要な役割を果たし、物語の展開と大いに関わっている。「塞下曲」は内容的に戊辰戦争時の戦況と一致しているばかりではなく、後半の「虜中白骨行応朽、楼上紅粧尚思婦」の2句に表現されている価値観も新三郎の内面と合致している。換言すれば、「塞下曲」こそ、新三郎が苦心して作ろうとする城の歌そのものではなかろうかと思われる。

4. 「白羽箭」に見る鏡花の反戦思想

鏡花は明治32年に会津に旅行し、「会津より」を發表、そして明治33年の1月に「弓取町人」を書いたが、それは「白羽箭」における「竹子姫」、「謹上再拜」の内容と一部重なっている。弓術の愛好家である商人の佐野屋、宮相撲の関取である作太郎、役場の助役である小此木という3人連れが会津若松の荒れ果てた城に向かう。これは、その日催された弓術の会にふらりと現れて5射連続的中させた美青年が城の中に消えたということを知り、その青年は白虎隊の若者の霊に違いないと決めつけ、その後を追ってきたのである。城の手前で3人が尻込みしていると女が現れ「皆お帰り、此処は来る処ぢやあない……」ときっぱり言われ、3人は慌てて逃げ出す。

「弓取町人」は内容から見ると、主として因縁のある古城に、神秘的な男女が出現したことを中心に展開される怪異譚である。しかし、3年後の「白羽箭」になると、題名から戦争とのかわりを提示し、古城の風景から、主人公の来歴、清瀧楼の女房とお房の語りに至るまでより現実的な作品となっている。ともに会津への旅行をもとにした作品として、「白羽箭」は「弓取町人」から筋を引きながら、戦争に関わる要素を多く取り入れており、戦争文学としての一面は決して看過してはならない。作品分析をもとに「白羽箭」における反戦的要素を分析してみよう。

「白羽箭」の舞台は会津戦争の戦場であった若松城であり、登場人物はほとんど何らかの形でその戦争と関わっている。物語の発生時は葉月（陰暦の8月）の末で、それはちょうど戊辰戦争で会津が新政府軍に攻められ、藩士達が籠城し、白虎隊が自ら命を落とした時期と重なっている。にもかかわらず、若松では竹子姫の入国を祝うべく、「市中残らず、提灯を点けまする、旗を出しまする、花火は揚げまする、催事やら、造物やら、十年以来の賑」である。しかし、そのようなにぎやかさの裏には、お房や清瀧楼の女房のように、戦争によって深く傷つけられて、いまだに癒されていない人もいる。

一方で、お房の茶屋へ来て、お房をいじめる多十と三吉のような人もいる。お房に対して、「私等、我等はア御国^{わしら わしらは みくに}のために兵隊になるだアぞ。こんなものを飲むと汚れるだ。」と嫌味を言っている2人はこれから軍隊に入り、時期からいうと後の日露戦争に参加する人であろう。彼らは過去の戦争を振り返ることなく、一途に「御国のために」兵隊になることを望んでいる。戊辰戦争でひどい目に遭ったのをすでに忘れ、戦争に熱狂する一部の庶民のあり方が描かれているのである。このような軍国主義や戦争熱に対する批判は従来鏡花の戦争文学における重要な主題の一つなのである。

以前の会津戦争を歴史的背景として、間接的に戦争を否定しようとするのが「白羽箭」に見られる重要な手法である。お房と清瀧楼の女房は戦争のため家族を失い、間接的に戦争に苦しめられている人であり、お房の伯母の姑のように、戦争のため、異常な心理状態になり、なかなか抜け出すことができない人も多くあるはずである。戦争が終わっても、人々の心の中の戦争は容易に終わることはなく、長く人々の心を蝕み続けている状況が描かれている。それは作中で「怨恨」として表現されているであろう。

また、「白羽箭」では戦争について、惨烈な戦いより、人間性の蹂躪に力点を置いて描かれている。清瀧楼の女房の父親は「藩の者」に殺されてしまい、お房の母親は姉の姑に自殺しろと責められているところを、敵であった長州の侍に助けられたように、戦争の周囲にあって、誰が味方か誰が敵かは容易に答えられることではない。長州の侍はその姑に対して「時々兵糧にやさしつかへても、同じ日本人ぢやないか」と言っており、ここでは敵か味方かという単純な2項対立を超越したような価値観が強調されている。

新三郎は「僕をして、当時此の処にあらしめば、譬へ一合三人扶持を頂かずと雖も、敵の片足も城の土は踏ませたくない。命を擲つて戦ひます」と言う。つまり、戦争の時にその場に居合わせたら、命を惜しまずに戦っていたのだろうが、戦争が既に終わっている今の時点で反省してみれば、そのような犠牲は本当に意味があるのかは問題である。戦争のため理性を失い、人を殺したり、自殺したりするのは人間としての悲劇に他ならない。城に身を置いた時、新三郎は城に降参したというのは、戦争に対する矛盾な心境や反省が喚起されたのであろう。

戦争に対して漠然としたイメージしか持っていなかった新三郎は、実際に旧戦場であった鶴ヶ城へ行ってみることを機に、過去の戦争を反省した上で、今の情勢を冷静に考えるようになったのである。先学の指摘のように「予備兵」や「海城発電」の時期の鏡花がただ反軍的で、反戦的ではない——戦争肯定的な一面がある——としたら、「白羽箭」の時には、反戦的な一面が浮上してきているように思われる。

おわりに

「白羽箭」は日露戦争の直前に、かつての戦禍で散々に苦しめられた若松を物語の舞台にし、

何らかの形で戦争と関わっている人間のあり様が描かれている作品である。にもかかわらず、これまで戦争文学としてあまり言及されてこなかった。本稿は戦争文学としての「白羽箭」を取り上げ、作中の漢詩的要素に焦点を絞って、鏡花の戦争観について論じてきた。

名に使われている「白羽箭」の漢詩的意味合いを考察し、作中の「白羽箭」は摩利支天に奉納する射術上達を祈願する神矢であると同時に、戦争の残酷さを象徴する武具である一面を究明した。更に、白羽箭を重要なモチーフとしている「北風行」を取り上げ、鏡花がそれを重要なモチーフとして本作に援用する背後には、漢詩的素養に基づいた理解が働いているだろうと述べた。

また、「白羽箭」に3度も引用される漢詩「塞下曲」を中心に作品を分析した。作品の全体を貫くこの詩は小説の基盤となる会津戦争の史実、物語の展開、主人公の心境の変化などと大きく関わっている。特に、この詩に託される戦争に対する批判も見逃してはならない。主人公の新三郎が、城の歌が作れないというのは戦争を目の前にしての文人としての「失語」とも理解できると思われるが、戦争を目の前にしながら、それを阻止するようなことは何もできない自己への批判、文人としての無力さも読み取れる。

冷静に観察すると同時に、人道的な思考をしている新三郎から、ある程度鏡花の戦争に対する態度もうかがえよう。「白羽箭」が発表された明治36年の11月は日露戦争の直前で、戦争を目の前にして、作家として矛盾した気持ちが託されていると同時に、「海城発電」や「琵琶伝」の2作と比べ、反戦的態度がより明確に表出されている一作だと思われる。

【注】

- 1 『鏡花全集』（岩波書店 1973）巻1に収録されている「泉鏡花年譜」。
- 2 村松定孝「泉鏡花の反戦小説——その軍人憎悪をめぐって」（『文化評論』377, 232-238. 1992）。
- 3 三浦一仁「泉鏡花——反軍小説家として」（西田勝勝『戦争と文学者：現代文学の根底を問う』三一書房 1983）。
- 4 同注2。
- 5 小林弘子「『海城発電』——明治軍国主義と赤十字博愛精神」（『泉鏡花 逝きし人の面影に』梧桐書院 2013）。
- 6 吉田昌志「ふたつの『予備兵』——泉鏡花と小栗風葉」（『日本近代文学』41, 1-12. 1989）、吉田昌志「泉鏡花『海城発電』成立考」（『青山語文』23, 39-50. 1993）、菅聡子「日清戦争という〈表象〉——一葉・鏡花のまなざしをめぐって」（『文学批評 叙説Ⅱ』08, 126-137. 2004）、禧美智章「『戦争』小説としての『海城発電』——例外状態と『剥き出しの生』をめぐって（泉鏡花 研究会編『論集 泉鏡花』19-35. 2011）、梅山聡「『海城発電』論への一視点——清戦争劇・軍夫・鏡花のパラドックス」（『東京大学国文学論集』7, 133-152. 2012）。
- 7 田中勲儀「『白羽箭』の成立過程——鏡花と会津若松」（『鏡花文学の成立』双文社 1997）、本論文の初出は1983年の『文林』第18号である。
- 8 鏡花の漢詩関係の蔵書部数は『鏡花全集』（岩波書店 1941）月報14にある長谷川覚の「泉鏡花蔵書目録」を参考にまとめたものである。

- 9 搜韻ウェブサイト <https://sou-yun.cn/QueryPoem.aspx> に「白羽箭」をキーワードで検索した結果、27首ヒットした。(2021年9月25日まで) そのうち、雨雪の譬えとして使われているのは4首で、ほかはすべて戦争に関する詩である。詩文の引用について、楊詩は彭定求等編『全唐詩』(中華書局 1985) 卷50、陶詩は『全唐詩』(同前) 卷146、陸詩は錢仲聯校註『劍南詩稿校註』(上海古籍出版社 1985) によった。下線は筆者が引いたものである。
- 10 『分類補注李太白詩』(明嘉靖22年の呉会郭云鵬編(宝善堂)刊本)を参照、参考ウェブサイトは https://new.shuge.org/view/fen_lei_bu_zhu_li_taibai_shi/ である。
- 11 笈久美子『鑑賞中国の古典第十六卷 李白』(角川書店 1988)。
- 12 注11の笈久美子『鑑賞中国の古典第十六卷 李白』を参考にした拙訳である。
- 13 『詩歌総集叢刊 明詩卷 列朝詩集』(清順治9年毛氏汲古閣刻本)(上海三聯書店 1989)を参照。
- 14 現代語訳は筆者が書いたものである。
- 15 会津若松市出版会編『会津の歴史』(講談社 1972)を参照。
- 16 同注15。

付記

「白羽箭」の引用は、岩波書店版『鏡花全集』第5巻(1974年)によった。引用に際して、漢字は新字体に改めた。

(う たつ：遼寧省大連外国語大学軟件学院講師、城西国際大学大学院人文科学研究科
博士課程比較文化専攻退学)

Abstracts

Izumi Kyoka's Anti-War Ideology in "The White Arrow": Focusing on Chinese Poetry

Yu Da

This paper focuses on the elements of Chinese poetry in "The White Arrow" and discusses the author's view of war. Through the analysis of the Chinese poetic connotations of "white arrow" in the title and the Chinese poem "The Frontier Songs", which has been quoted many times, this paper highlights the anti-war thought reflected in the novel. Published in 1903, just before the Russo-Japanese War, "The White Arrow" reflects the author's contradictory attitude towards the war and shows a more distinctive anti-war attitude than his earlier literary works such as "The Telegram from Haicheng" and "Pipa Biography".